

研究論文

インタビューにおける複層的インフォーマント理解の試み

— 大学生のインタビュー時メタ思考の分析から —

An Approach to “Polyphonic Informant Analysis” in interview

— Through an analysis of meta-thinking in interview —

桂川 泰典 Taisuke KATSURAGAWA

早稲田大学人間科学学術院

Faculty of Human Sciences, Waseda University

要 旨

本研究は、インタビュー調査中にインフォーマントが認識しながらも語ることのない「言葉にならなかった言葉」を「インタビュー時メタ思考」と名づけ、大学生らに対する質問紙調査によってその実態を調査したものである。その結果、〈評価不安〉、〈伝達意思〉、〈情緒的期待〉、〈ストーリー戦略〉、〈言語化困難〉、〈共約不可能性〉、〈社会的意義〉、〈場の適切さ〉の8因子からなる「インタビュー時メタ思考尺度」が作成され、再検査信頼性の確認がなされた。また、「自己意識尺度」を用いた併存的妥当性の検証が行われ、多くの因子で自己意識との関連が示された。一方で〈情緒的期待〉、〈社会的意義〉の2因子は「自己意識尺度」とは関連の低い心理特性であった。続いて、インフォーマントの研究協力動機がインタビュー内容にどのような影響を与えうるかを検討するために、「インタビュー動機を尋ねる独自質問」を作成し「インタビュー時メタ思考」への影響を検討した。その結果、無条件でインタビューに応じる者は調査者へ〈情緒的期待〉を有する傾向があること等が明らかとなった。

Abstract

In this study, “meta-thinking in interview” was defined as the words informants didn’t open their “unuttered words”, even though they realized it in the survey interviews. Through the questionnaire for undergraduate, “Meta-thinking in Interview Scale” were constructed by eight factors. The eight factors were named <evaluation anxiety>, <will of communication>, <emotional expectation>, <story planning>, <difficulty in verbalization>, <incommensurability>, <social significance> and <proper situation>. The scale was statistically verified with the scale’s test-retest reliability and concurrent validity. It was confirmed that most of factors of “Meta-Thinking in Interview Scale” was affected by “self-consciousness”, however, “self-consciousness” scarcely related to <emotional expectation> and <social significance>. To examine the possibility how the informant’s motivation effect on the contents of law interviews, this study analyzed the relationship between “Meta-thinking in Interview Scale” and “Questionnaire on Motivation for Interview”. The result showed that informants who accept a proposal of interview without any benefit tended to have <emotional expectation>.

1. はじめに

1.1 インタビューデータ分析における困難が示すもの

「質的研究テキスト一覧」^[1]によれば、日本におけるインタビュー等の質的なデータの分析に関する主要な著作は2005年前後を境に飛躍的に増加しており、1つの大きな潮流となっていることが伺える。しかしインタビューデータの分析には依然として困難な点が多い。それにはさまざまな理由が考えられるが、ここではその理由を大きく2つあげたい。

1つ目は、コーディングの問題である。インタビューデータはそのままでは単なる話し言葉の素描にすぎない。調査によって得られた情報を分析の俎上にあげるには、一定の編集（取捨選択）をともなったコーディング（データの置き換え）が不可欠である。その際には、インフォーマントの一次的意味構成を損なわないように調査者の主観をコントロールした分析法が求められる^[2]。具体的にはインフォーマントが発した言葉のイン

フォーマント自身による意図を損なわぬよう的確な箇所を抽出し、抽象概念化や言葉のカテゴリ化を行うことを保証せねばならない。しかし、インタビュー音声の録音や丁寧なトランスクリプト作業、コーディング時の複数研究者による検証等、推奨される手続きはあげられるものの、現在まで研究法としての定石は確立しているとは言い難い。

2つ目は、語りがもちえる「多様性」と「不確かさ」である。インタビューでは調査者の面接の仕方によって得られる情報が変わるおそれがある^[3]。インタビューにおいて調査者から質問を投げかけられたインフォーマントが、記憶を手探りに想起し、文や物語を構成し、発信するという行為には少なからず記憶の歪みやインフォーマントによる選別、創造的側面が伴っている（パートレットの想起研究^[4]などがある）。そのことはインタビューデータの信頼性（例：「いつ・どこで・誰が聞いても同じ答えが返ってくるのか」という問題）や妥当性（例：「言葉はインフォーマントの住む文化に強く結びつけられた意味や

語用をとまなうものであり、調査者がインフォーマントと同じようにその言葉を理解できているか」という問題)の保証を非常に難しいものにしている。

しかし「話される証言は、まったく同じように繰り返されることは決してない。まさにこの矛盾点が、証言を人間の実態に近づける」^[6]といわれるように、原理的に人間の語りとは、多様で不確かな側面をとまなわざるをえない。語りとは語られなかった無数の言葉の可能性の上に成り立っていると言い換えてもよいだろう。

「セラピーでは内容テーマにのみ焦点を当てるとさまざまな限界にぶつかることになる」^[6]といわれることがある。また、精神科の診断面接においては言葉の内容的理解だけでなく、「語られるコトバを鳴き声の一種として」、つまり生体機能や情動の発露として捉える必要があるとも言われる^[7]。語られた言葉の内容にのみ焦点をあてている内は対象の理解を損なってしまう場合もしばしばである。セラピーにおいて母親が「あの子にはもっとがんばってもらいたいです」と語る時、そこには会社でうだつが上がらない夫への不満が屈折して表現されている場合もあれば、乳児期に不慮の事故で亡くなった長男への想いが込められている場合もある。その言葉の背景が面接の終盤になって明らかとなることもあれば、遂に詳らかにされないこともある。語りを分析の対象として人間の営みを理解しようと試みる時、このような語りももちえる「言葉にならなかった言葉」をどれほど考慮できるかが問われるのである。本論文は、上記の問題意識よりインタビューデータの背後にある「言葉にならなかった言葉」を含めたインフォーマントの包括的理解を「複層的インフォーマント理解」と命名し、その分析のための枠組みを提起しようと試みるものである。

1.2 インタビューデータの信頼性・妥当性とは

では、このような多様で不確かな側面をあわせもつインタビューデータを研究対象として扱う時、データの信頼性・妥当性とはどのように担保されるものであろうか。

自然科学における素朴な実証主義(positivism)の認識論に依拠するならば、信頼性に関しては以下のように考えられる。素朴な実証主義の立場では、科学的な真理とはその表象との間に直接的な対応関係を有しており、それは研究者のバイアスを排した「客観的」な観察のもとで知覚可能な事象である、と考える^[8]。この立場に立つならばインタビューデータの信頼性も「事象の生起頻度」と「サンプリングのランダム化」によって保証することが可能である。つまり、性別、年齢、経済状況、思想・信仰など、あるデモグラフィックデータの観点からみた際の「偏りを排した」サンプリングを行った上で、その中でなるべく多くのインフォーマントから共通して得られたデータは信頼に足るデータと呼ぶことができる。しかし、この手法ではある集団の構成員がもつ最大公約数としての共通項モデルを抽出することはできても、個人がもちえる矛盾した意思決定の論理や複雑な利害関係、「言葉にならなかった言葉」を含めた「インフォーマントの複層的理解」には至りにくい。

人文・社会科学のパラダイムではどのような試みがなされ

ているかを考えてみたい。例えば文化人類学においては、イギリス人類学におけるリヴァーズらの重点的調査(Intensive Research)の方法論に端を発し、それを受けてマリノフスキーが体系化したフィールドワークの基本的理念が現在に至るまで研究法に多大な影響力をもっている^[9]。マリノフスキーの考えとは、現地に長期滞在し、現地語を習得し、そこに住む人々との信頼関係を構築し、可能な限りその人々の生活に密着して調査すべきである、という考え方である^[1]。インフォーマントの生活の網の目の中に調査者が限りなく接近して「内部者の視点(emic)」^[10]からデータを収集すべしという発想でもある。今日から見れば、この手続きを経ることでデータの信頼性・妥当性に関する誤謬を少しでも小さくしようという経験的方法知であると理解できる。一方で、長期とはどれほどの長さを意味し、言語の習得とはどのレベルをもって十全といえるのか等、方法的にはあいまいにならざるをえない点も多く、最終的な判断は研究者のセンスと熟練に委ねられている^[2]。

一方で、自然科学的な観察手続きを、個別のインフォーマント内で適用する立場がある。鈴木^[11]はインタビューにおける回答の信頼性を(1)「発言内容にあいまいさがない」、(2)「内的一貫性がある(話の内容に相互矛盾がない)」、(3)「外的一貫性がある(調査テーマに関してあらかじめ面接者のもっている知識や情報と、それに関する回答内容が一致している)」の3点で確認すべきとしている。この3点に疑問が残る場合は、インフォーマントが「社会的望ましさ」で回答している」「記憶が誤っている」「面接者と反りが合わない」可能性や、面接者の「面接のテクニックが不適切である」可能性を疑うべき、としている。

しかし、ある一貫した意見を述べているようであっても、その意見は決して不動なものではないことがある。鳥越^[12]はインフォーマントの意見とは、ある条件下でたまたま選択された、複数の選択肢のうちの1つに過ぎないのであり、その行為のみをもって対象を理解しようとすることは危険であると指摘する。また、小林^[13]によればライフヒストリーインタビューにおいては「語り手」と「聞き手」の共同作業によって語りが構築されており、特にあいづちを通した「関係」レベルでの親密さの形成が語りの「内容」のレベルに影響し、内容に多様なバージョンを生み出すことが指摘されている。また、意見のあいまいさやある種の矛盾は「鳴き声としてのコトバ」^[14]であることも考えれば、インタビューデータの信頼性を考えることがいかに難題であるかは明らかである。

2. 先行研究

2.1 インタビューデータに影響をあたえる要因

前項では従来の研究パラダイムでインタビューデータの信頼性・妥当性を捉えることの難しさについて論じた。本項ではこの議論は一旦留保し、インタビューデータに影響を与える要因にはどのようなものがあるのかについて整理してみたい。

多くのインタビューおよび調査的面接の概論書では、面接者がインタビューデータに与える影響を非常に重視している。斎

藤^[15]は面接者が自覚しておくべき要件として「総合的判断と理解力」「偏らない中立の信念態度」「性格における内性傾向」「外見と容姿」「責任感と真面目さ」「言語の明瞭性」「男女差」の7つをあげている。また、鈴木^[16]は、「調査的面接法は二人の人間の対面による直接的な相互作用なくしては行えない調査である」として、面接者の「スキルの熟練度」「経験」「態度」「パーソナリティ」「調査への姿勢」「ことば遣い」「能力」「性」「年齢」「容貌」「社会階層」「人種的背景」等がデータに影響を与えると述べている。

桂川^[17]はインタビューにおいてインフォーマントの語りが何からの影響を受け、構成されているかについて、インタビューデータ中における影響の明示性の観点から分類を試みている。そして、インタビューデータの中で注目すべき「情報」の所在とそこに含まれる具体的要素、またその要素をどのような視角で分析可能かを整理している（表1）。この観点より考えるならば、インタビューデータは多くの場合「言語表現」がなされたものを主たる情報源として、そこに「メタ表現」を加味し、調査者は分析・解釈を行っていることが想像される。先述したような、調査者が与える影響はインフォーマントにとっては主に環境変数に属していることが伺える。

しかし、インフォーマント自身によって言語的にその影響は表現されずとも、心理変数に属する要素が表現される語りに影響を与えていることは多くの研究者が指摘するものである。

2.2 研究協力動機がインタビューにおよぼす影響

インタビューデータに影響をおよぼすとされる心理変数は多数あるが、中でも研究協力動機（「なぜ語るのか」）についてはその影響がしばしば指摘がされている。プラマー^[18]は調査研究において「対象者の側の調査に応ずる動機を把握しておく必要」があることを強調している。山本・林^[19]はインタビューデータを歪める研究協力動機として、いわゆる謝礼目当ての場合とこの種の調査に対する「異常な関心を示す興味本位」の2

つをあげている。高橋^[20]も同様に好奇心と謝礼が動機に大きく関与していること、および（自分の場合ではない、と謙遜しながらも）場合によっては調査者の魅力が関わってくることを指摘する。また、フィールド調査において「なぜ人々は、私の調査に協力してくれるのだろうか？」と自問し、「私の研究の重要性を理解してその発展のために協力してくれるのではないことだけはたしかである。」と述べている。

オールポート^[21]は、人が自分自身を積極的にさらけ出す際の動機を13の要因にまとめている。1.「特定の弁明」（自己正当化）⁽³⁾、2.「露出趣味」（自己陶醉）、3.「秩序に対する欲求」（自己の体験の整理）、4.「文学的なよろこび」（自身の体験を繊細で快い方法で表現することの審美的よろこび）、5.「個人的なパースペクティブの獲得」（人生の岐路において新たな行動方針を考えだしたいという欲求）、6.「緊張からの解放」（カタルシス）、7.「金銭の獲得」、8.「割り当て」（授業における課題のような場合）、9.「治療の補助」（セラピーにおける語り）、10.「贖罪と社会への再統合」（宗教的あるいは世俗的な告白と社会復帰への嘆願）、11.「科学的な興味」（自己を客観的に分析したいという動機）、12.「社会奉仕とその例」（自己の体験を社会改革や模範、警告のために社会に提示する場合）、13.「不朽性に対する欲求」（自己の存在が忘却されることにに対する抵抗）。

以上より、研究協力動機がインタビューデータの内容に大きな影響を与えていることはおそらく間違いないだろう。そうであるならば調査者はインタビュー調査の目的に合わせて、研究協力依頼の条件や提示の仕方を工夫したり、事前のスクリーニングを行う等して、その研究でもっとも有用なデータを提供してくれるインフォーマントの参加が得られるような配慮を行わねばならない。とはいえ、研究協力者の希少性を思えばインフォーマントの選択を操作的に行うことは現実的には極めて厳しいことが多い。

しかし、データ採取後にこの視点を活かすことは多いに可能

表1 語りの構成

表現方法	「情報」の所在	要素	分析の視角
言語表現	語りの内容	個人的事実 （経験的事実、粉飾された事実、虚偽の事実）、 神話的事実、集合的事実、歴史的事実、社会的事実	複数の相対的事実
	語りの様式	定型表現、決まり文句、比喩、冗談、逸話、 サクセスストーリー、経験、伝聞、伝承、告白、懺悔、 裏話、ここだけの話	
メタ表現	語りの形式	文法、時制	知性化能力、 他者への伝達意思、 メタメッセージ、 語りへの態度、 語りの意味づけ
	語りの修飾	表情、声の抑揚、身体特徴とその加工（化粧など）、 動作、身振り、身体接触、	
	語りの構造	物語的統合、起承転結、時間的配列、 重みづけ（強調点）、時間的長さ	
非表現	環境変数	語りの場、語った人数、語った時期、 調査者の個性・属性・立場・態度、“実験者効果”	
	心理変数	語る動機、見栄・照れ・不安などの“心理機制”、 「当たり前」による割愛、 「わかってもらえない」諦め、情報流出の恐れ、 現在の気分、語り内容との心理的距離、 調査者とのラポール、“要求特性”、“志願者特性”	内容の限定性

である。つまり、データがどのような条件、動機の中で語られたものなのか、データのバックグラウンド要因を調査者が可能な限り認識し、分析・考察に反映させるというあり方で研究協力動機等の心理変数は活かすことはできるものと考ええる。しかし、インタビューへの影響が大きいとされる研究協力動機であっても、実際のインタビューおよびデータ内容に対してどのような影響を与えるのかはこれまで明らかになっていない。

そこで、本研究はまずインタビュー調査中にインフォーマントがどのような環境変数、心理変数に関する認識をもっているのかについて「インタビュー時メタ思考」という枠組みより調査を行う。その上で、特に心理変数の中でも、研究協力動機がインタビュー内容にどのような影響を与えるかを検討するため、その前段として動機がインタビュー時メタ思考にどのような影響を与えるのかについて調査を行う。

このように、インタビュー内容には直接表れない、心理変数・環境変数のインタビュー中の思考への影響を明らかにすることで、「多様性」や「不確かさ」をあわせ持つインフォーマントを複層的に理解するための、より信頼できる、より妥当な意味付けを持ったインタビューデータ分析法の発展に寄与できるものと考ええる。

3. 目的

インフォーマントがインタビュー実施時にどのような環境変数、心理変数の影響を認識し、メタ思考をもちながら語りうるのかについて場面想定による質問紙を用いて調査を行い、「インタビュー時メタ思考尺度」を作成する。尺度は再検査信頼性の検討、併存的妥当性の検討を行うものとする。続いて、インタビューに影響を与えるとされる心理変数のうち研究協力動機に焦点をあて、動機がインタビュー時メタ思考にどのような影響を与えるのかについて調査する。それにより、インフォーマントの心理変数がインタビュー中の「言葉にならなかった言葉」にどのように反映されうるかを考察し、インタビューデータの分析に際して、内容的理解に留まらない「インフォーマントの複層的理解」へとつなげることを目的とする。

4. インタビュー時メタ思考の収集

4.1 目的

インフォーマントがインタビュー時にどのようなメタ思考を行っているかについての予備調査を行い、広く項目を収集することを目的とする。

4.2 方法⁽⁴⁾

(1) 調査対象者と時期

2010年10月、関東圏内の大学・専門学校に通う学生に教場にて調査を依頼した。内訳は以下の通りである。4年制大学理学部（千葉）、4年制大学人間科学部（埼玉）、医療系専門学校（栃木）計78名（男性＝38名、女性＝40名）

(2) 調査材料

自由記述式質問紙（以下、教示文）⁽⁵⁾

あなたは、ある人にたのまれて、インタビュー調査に応じることになりました。内容は、「あなたのこれまでの人生であった《重要な出来事》と《その時の気持ち》について語ってほしい」というものです。「インタビュー中」、あるいは「インタビューの前後」にあなたはどのようなことを《考え》ますか。また、「インタビュー中」はどのように《振舞い》ますか。

(3) 分析

筆者（大学教員・臨床心理士）と臨床心理学専攻の大学院生2名の計3名でKJ法に沿って整理、分類を行った。分類の妥当性のチェックを心理学系大学教員1名に依頼し、疑義のついた項目は合議により再分類を行った。

4.3 結果

計282項目を収集し、22分類81項目に集約された。

22分類のラベル：〈研究への懷疑〉〈研究者への疑問〉〈研究協力失敗不安〉〈伝達意思〉〈プライバシー〉〈妥協・諦め〉〈見返り〉〈他者評価不安〉〈無理解不安〉〈研究者への期待〉〈研究への期待〉〈戦略〉〈嫌悪・防衛〉〈恥じらい・感傷〉〈緊張・抵抗・不安〉〈聞き手を満足させたい〉〈聞き手への配慮〉〈分析されることの不安・嫌悪〉〈混乱〉〈場の適切さ〉〈言語化における問題〉

4.4 考察

研究自体への懷疑や疑問、時間をとられることへの嫌悪等、インタビューを受ける際の防衛的な“構え”が多く抽出された。一方で、調査者を満足させたり、上手に伝えることに意識を向ける者も多く、上手く伝わらない時は不安や不満を感じる者と「伝わらなくてもしょうがない」という割り切りの気持ちをもつ者等に分けられた。多くの項目において「自己をどのように見せるか」、「他者の目にどのように自分が映るか」といった自己意識特性との関連が示唆された。

5. 「インタビュー時メタ思考尺度」の作成

5.1 目的

4.で収集・分類された81項目のインタビュー時メタ思考について、質問紙調査による6件法の尺度評定を行い、因子分析を通して、「インタビュー時メタ思考尺度」を作成する。

5.2 方法

(1) 調査対象者と時期

2010年11月～2011年1月、関東圏内の大学・専門学校に通う学生に教場にて調査を依頼した。内訳は以下の通りである。4年制大学理学部（千葉）、4年制大学人間科学部（埼玉）、4年制大学文学部（茨城）、医療系専門学校（栃木）計417名（男性＝212名、女性＝205名）、平均年齢＝20.42歳、標準偏差＝3.22

(2) 調査材料

前項で収集した 81 項目について 6 件法の尺度評定を依頼した。教示文は 4.1(2)で示したものに以下を付加したものである。

(略)・・・以下の文章はその時のあなたの《考え》や《振舞い》にどの程度あてはまるでしょうか。右欄の 1 (まったくあてはまらない) ～ 6 (とてもあてはまる) から 1つ選んで○をつけてください。

(3) 分析

因子分析

5.3 結果

因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行い, スクリーンプロットの減衰と解釈可能性より 8 因子解を採用した(固有値は 8.85 ～ 1.23)。因子抽出後の共通性が .25 以上, 因子負荷が 1つの因子について .40 以上かつ 2 因子にまたがって .40 以上の負荷

を示さない 37 項目を抽出し, 因子数を 8 に指定して再度因子分析を行った(表 2)。

第 1 因子は, 自分の意見が調査者にどのように伝わっているか, 評価されているかを懸念する項目であり〈評価不安〉と命名された。第 2 因子は, 調査者に対して正確に解りやすく熱意をもって伝えたいという意味であり, 〈伝達意思〉と命名された。第 3 因子は, 調査者に対して励ましや共感, 好意などの情緒的交流を期待する項目であり, 〈情緒的期待〉と命名された。第 4 因子は, 全体を通して語りがよい印象を与えるようにとの戦略的意図をもつものであり, 〈ストーリー戦略〉と命名された。第 5 因子は, 自分のことがうまく表現できない不安や混乱に関する項目であり, 〈言語化困難〉と命名された。第 6 因子は, 自分のことは他人には理解できないものであるという諦念に関する項目であり, 〈共約不可能性〉と命名された。第 7 因子は,

表2 インタビュー時メタ思考尺度(最尤法・プロマックス回転, $\alpha = .899$)

No	項目	因子								
		1	2	3	4	5	6	7	8	
第1因子: 評価不安 (α = .869)										
Q55	話したことで、インタビュー後にインタビューアーと気まずくならないだろうか	0.937	0.006	-0.029	-0.049	-0.078	-0.027	-0.001	-0.048	
Q12	まじめに話をしても、真剣に受け取ってもらえないだろうか	0.740	-0.036	-0.077	0.012	-0.034	0.087	0.121	0.085	
Q37	他人とくらべて自分の話は一般的なのだろうか	0.695	-0.065	-0.026	0.061	0.061	-0.040	-0.003	0.019	
Q76	話すことで、自分に対するマイナスの印象を与えてしまわないだろうか	0.695	0.039	0.085	0.043	0.002	-0.043	-0.119	0.036	
Q40	レベルの低い話だと思われるだろうか	0.644	0.064	-0.043	0.047	0.168	-0.011	-0.055	-0.125	
Q25	自分の話を理解していないのではないだろうか	0.571	-0.050	0.071	-0.159	0.095	0.052	0.143	0.109	
Q24	インタビューアーと意見が対立するかもしれない	0.462	-0.009	0.147	-0.028	-0.158	0.176	0.086	0.021	
第2因子: 伝達意志 (α = .851)										
Q34	一生懸命伝えようとする	0.001	0.796	0.013	-0.050	0.061	-0.107	-0.029	0.000	
Q11	出来るだけ詳しく伝えようとする	-0.015	0.754	-0.001	-0.007	0.004	-0.027	0.041	-0.069	
Q7	どのように話すと、伝わりやすいだろうか	0.058	0.730	-0.050	-0.007	-0.052	0.045	0.009	0.038	
Q10	簡単に、分かりやすく伝えるようにする	-0.047	0.722	-0.083	0.090	-0.117	0.109	0.017	0.055	
Q18	出来るだけ正直に話そうとする	-0.135	0.608	-0.018	-0.018	0.023	0.075	0.054	0.025	
Q35	よい内容(データ)を提供したい	0.035	0.521	0.211	-0.006	0.022	-0.011	0.056	-0.077	
Q41	相手の求めに応じた適切な回答ができてい	0.171	0.494	0.052	-0.007	0.092	-0.097	-0.113	0.019	
第3因子: 情緒的期待 (α = .855)										
Q77	インタビューアーにもこの話題について考えてもらいたい	-0.039	0.010	0.830	-0.126	-0.047	0.006	0.156	0.051	
Q80	インタビューアーに関心や好意をもってもらいたい	0.011	-0.023	0.784	0.097	0.094	-0.111	-0.103	-0.061	
Q42	インタビューアーに共感してもらいたい	0.033	0.044	0.742	0.118	-0.065	0.014	-0.149	-0.004	
Q31	インタビューアーに励ましてもらいたい	0.148	-0.073	0.709	0.078	-0.030	0.007	-0.065	-0.078	
Q32	自分の話について、インタビューアーの考えを聞きたい	-0.132	0.030	0.598	-0.114	0.021	0.084	0.164	0.188	
第4因子: ストーリー戦略 (α = .797)										
Q79	自分を良く見せるように話す	0.088	-0.036	0.002	0.784	0.004	-0.048	-0.086	0.054	
Q30	大袈裟に話す	-0.031	-0.028	-0.047	0.681	-0.107	0.039	0.073	0.053	
Q33	(悪い話ではなく)良い話について話そうとする	-0.026	0.106	-0.031	0.584	0.038	0.054	-0.082	0.116	
Q51	自分の過去の経験を誇らしげに話す	-0.077	0.005	0.074	0.562	0.020	0.030	0.226	-0.060	
Q75	感動的になるように話す	-0.024	-0.027	0.156	0.550	0.046	0.018	0.207	-0.080	
第5因子: 言語化困難 (α = .809)										
Q43	自分の感情をうまく言葉にすることができない	-0.071	-0.053	0.137	-0.051	0.876	0.080	-0.133	0.010	
Q14	大事なことはなかなかうまく話せないように感じる	0.013	-0.009	-0.046	-0.096	0.733	-0.001	0.072	0.030	
Q16	その出来事について、正確に理解・把握することができていないと感じる	-0.015	0.038	-0.020	-0.004	0.668	0.051	0.151	0.019	
Q52	何を話していたかわからなくなることがある	0.121	0.002	-0.145	0.162	0.583	-0.059	-0.021	-0.015	
第6因子: 共約不可能性 (α = .796)										
Q54	話をしても解決しないので話さない	0.037	0.018	0.059	0.035	-0.010	0.732	0.001	-0.070	
Q23	自分のことを深く理解してもらう必要はない	-0.100	0.019	-0.055	0.090	0.050	0.701	-0.139	-0.010	
Q78	自分の話をすることは意味のないことだ	0.047	0.027	-0.001	-0.025	-0.010	0.696	-0.112	0.002	
Q13	自分の気持ちや考えは他人にはわからない	0.147	-0.009	-0.030	-0.028	0.078	0.628	0.095	-0.004	
第7因子: 社会的意義 (α = .819)										
Q22	自分の意見を世の中に伝えたい	-0.027	-0.018	-0.027	0.073	0.083	-0.095	0.804	-0.003	
Q17	自分の考えや経験を記録に残したい	0.073	0.041	-0.027	0.065	0.040	0.012	0.709	-0.014	
Q44	所属する集団や世代の代弁者として意見を伝えたい	0.059	0.037	0.010	0.007	-0.068	-0.053	0.689	-0.038	
第8因子: 場の適切さ (α = .932)										
Q53	今は、この話題を話してもよい場・状況だろうか	0.005	-0.008	0.007	0.066	0.005	-0.052	-0.050	0.990	
Q9	今は、この話題を話してもよい雰囲気だろうか	0.044	0.027	0.031	0.034	0.047	-0.013	0.000	0.815	
因子間相関		第1因子	1.000							
		第2因子	0.319	1.000						
		第3因子	0.445	0.458	1.000					
		第4因子	0.461	0.238	0.442	1.000				
		第5因子	0.539	0.216	0.336	0.302	1.000			
		第6因子	0.288	-0.282	-0.151	0.025	0.100	1.000		
		第7因子	0.206	0.269	0.414	0.317	0.054	-0.133	1.000	
		第8因子	0.333	0.261	0.320	0.114	0.442	-0.003	0.122	1.000

インタビューに応じることで、自分の意見が社会的意義をもつことを期待するものであり、〈社会的意義〉と命名された。第8因子は、周囲の環境やインタビューの雰囲気に合わせて話す内容を決めようとするものであり、〈場の適切さ〉と命名された。

尺度の内部一貫性の指標であるクロンバックの α 係数は全体で .899、因子毎で .796 ～ .932 と良好な値を示した。

5.4 考察

4.において収集・分類された自由記述が統計的なまとまりをもって構造的に示された。優れた尺度とは、ある構成概念をなるべく少ない項目を使つて的確に表象したものである。その意味では、8因子という構造はやや冗長であるとも考えられるが、今後実際の語りの内容分析とメタ思考の関連を検討する等の研究上の発展に際してはある程度網羅的にメタ思考を抽出しておくことが重要であると判断した。そのため、因子分析は十分な因子負荷量、 α 係数等、統計的正確さを担保できる範囲で項目を残す方向での解釈を行った。また、網羅的な因子構成となっているため、調査者がインタビュー時、および分析時に本尺度をチェックリストとして利用することが可能である。具体的には、調査者がインフォーマントについて「〈評価不安〉を感じていないか」、「〈情緒的期待〉をどの程度有しているか」等、各因子についてチェックしながらインタビューや分析を行うことでインフォーマントの複層的理解が進むことが期待される。

メタ思考とインフォーマントの特性に関しては、〈情緒的期待〉や〈社会的意義〉を求めるインフォーマントからの調査協力は比較的得やすい可能性がある。一方で、〈評価不安〉や〈言語化困難〉等のインタビュー協力に対してネガティブな評価をもつインフォーマントは、研究協力を取り付けるまでに、ラポールの形成や雑談によるアイスブレイク等、一定の手続きが求められる可能性がある。また、〈共約不可能性〉を強く感じている場合は、研究協力には応じない可能性も高い。そのようなタイプのインフォーマントから情報を得る場合は、一般的な調査的インタビューという手法が適さない可能性がある。

今後は、インタビュー時メタ思考の傾向によって、インタビュー内容にどのような差異が生じるかについて検討する必要があるだろう。

6. 「インタビュー時メタ思考尺度」の併存的妥当性の検討

6.1 目的

5で作成された「インタビュー時メタ思考尺度」の併存的妥当性を検討する。併存的妥当性の検討には外的基準尺度として「自己意識尺度」^{[22][23]}を用いた⁽⁶⁾。自己意識とはFenigsteinら^[24]が考案した尺度構成概念である。〈私的自己意識〉、〈公的自己意識〉、〈社会的不安〉の3因子から構成されており、自己に対する注意の向け方に関する性格特性の1つである。先行研究においては、〈私的自己意識〉の高い者は、自分の意見・態度を自覚しているために、行動と態度との一貫性が高いことが指摘されている^[25]。また〈公的自己意識尺度〉の高い者は他

者からの評価に過敏であったり、他者の評価を気にかけるために、自己表出のあり方をコントロールする傾向^[26]がある。また、自己顕示性との正の相関が指摘されている^[27]。

これまでの分析によって抽出されたインタビュー時メタ思考の因子（〈評価不安〉、〈伝達意思〉、〈ストーリー戦略〉、〈言語化困難〉等）は自己に対する内省的な視点や、他者の目に映る自己へ注意を向ける性格特性との関連があることが予測される。そこで、〈私的自己意識〉、〈公的自己意識〉、〈社会的不安〉の3因子の性格特性から構成される「自己意識尺度」を外的基準としてその関連を分析することで「インタビュー時メタ思考尺度」がどのような概念を測りうる尺度かについての検討を行う。

6.2 方法

(1) 調査対象者と時期

2011年1月～2月、関東圏内の大学・専門学校に通う学生に教場にて調査を依頼した。内訳は以下の通りである。4年制大学理学部（千葉）、4年制大学人間科学部（埼玉）、4年制大学文学部（茨城）、医療系専門学校（栃木）計209名（男性＝101名、女性＝108名）、平均年齢＝20.46歳、標準偏差＝3.27

(2) 調査材料

「インタビュー時メタ思考尺度」：8因子37項目（6件法）

「自己意識尺度」は〈私的自己意識〉、〈公的自己意識〉、〈社会的不安〉の3因子により構成されている。

「自己意識尺度」：3因子26項目（6件法）

(3) 分析

確認的因子分析：「自己意識尺度」

重回帰分析：「自己意識尺度」の3因子を説明変数、「インタビュー時メタ思考尺度」の各因子を基準変数として8因子すべてについてステップワイズ法（変数増加減法）による重回帰分析を行った。

6.3 結果

確認的因子分析：「自己意識尺度」の確認的因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果、既存の構造と同一の3因子構造が確認された。ただし、〈公的自己意識〉の「人に会うとき、どんなふうふるまえば良いのか気になる」は〈社会的不安〉との2重負荷が確認されたため、その後の分析から除外し、3因子25項目を分析に利用した。尺度の内部一貫性の指標、クロンバックの α 係数は〈私的自己意識〉、〈公的自己意識〉、〈社会的不安〉の順に $\alpha = .877, .862, .805$ と良好な値を示した。

重回帰分析：基本的な性格特性である自己意識（3因子）がインタビュー時メタ思考（8因子）にどのように影響を与えるかを重回帰分析によって検討した。結果をまとめたものを表3に示す。

6.4 考察

〈私的自己意識〉は自分の内面に興味をもち、客観的、内省的に捉えようとする性格傾向である。自身の内面を客観的表現に置き換え、他者にわかりやすく伝えようとする〈伝達意思〉

や自分の置かれている立場を客観的に把握しようとする〈場の適切さ〉に影響しているとの分析結果と符合する。

〈公的自己意識〉は自分が他者の目にどのように映っているかを意識する性格傾向である。〈伝達意思〉や語りによる印象の誘導を意図する〈ストーリー戦略〉に影響しているとの分析結果と符合する。また、他者からよく理解してもらおうことを意図しているため、他者に理解を求めない〈共約不可能性〉には負の影響が認められる。

〈社会的不安〉は人前で自分を表現することに強い不安感を感じる性格傾向である。自分がどのように評価されているかを懸念する〈評価不安〉や自分のことがうまく表現できない〈言語化困難〉に影響しているとの分析結果と符合する。また、〈共約不可能性〉に対する正の影響が見られるが、本研究の協力者が青年期の学生であることを考えると、他者に理解を期待しないという気持ちが自己表現の不安感と裏腹の関係であると考えれば整合するだろう。

インタビュー内容分析時の示唆としては以下が上げられる。〈公的自己意識〉の強いインフォーマントの場合、〈伝達意思〉や〈ストーリー戦略〉が強すぎるために、インタビュー内容が“歪む”可能性があることは注意が必要である。また、〈社会的不安〉が高いインフォーマントの意見は調査の週上に上りにくかったり、協力を得られても〈評価不安〉や〈言語化困難〉によって心情の適切な言語化が出来ていない可能性があることも同様に注意が必要である。

説明率 (R^2) の観点からは、〈情緒的期待〉、〈社会的意義〉に関しては自己意識（自己に対する注意の向け方）との関係で説明することは慎重であるべきと言えそうである。そのため、この2つの概念についてはどのような心理的背景を有するものであるのか今後さらに検討が必要である。その他のインタビュー時メタ思考因子については自己意識と一定の関連性を持った概念であることが示唆された。

7. 「インタビュー時メタ思考尺度」の再検査信頼性の検討

7.1 目的

本尺度が心理構成概念であるインタビュー時メタ思考の真値を安定的に測定可能かを検討するために、同一調査協力者に対して再調査（再テスト法）を実施し、再検査信頼性の係数を確認する。

7.2 方法

(1) 調査対象者と時期

2011年1月～2月、6.2(1)にて調査を実施した4年制大学人間科学部（埼玉）にて再検査信頼性の確認のため教場にて再調査を依頼した。前回の調査にてフェイスシートに任意の4ケタの数字を記入してもらい、その数字を本調査にて再度記入してもらうことで回答者の一致を確認した。回答の間隔は2～4週間であった。回答者は計76名（男性＝31名、女性＝45名）、平均年齢＝22.82歳、標準偏差＝2.64

(2) 調査材料

「インタビュー時メタ思考尺度」：8因子37項目（6件法）

(3) 分析

相関分析

7.3 結果

ピアソンの積率相関係数を算出した結果、8因子の相関は $r=.78\sim.91$ となり、再検査信頼性の係数として十分な値が確認された。

7.4 考察

「インタビュー時メタ思考尺度」が時間経過に伴う誤差に対して、一定の安定した回答傾向で測定を行えることが確認された。このことはインタビュー時メタ思考がインフォーマントの（状態的ではない）特性的な思考傾向と関連することを示唆している。

8. インタビューへの動機がインタビュー時メタ思考に及ぼす影響

8.1 目的

インフォーマントの調査に対する期待感等、研究協力動機によって回答内容が影響を受けることが知られている^[28]。そこで「インタビュー研究へ協力する際の動機」と「インタビューの回答内容」の間には「インタビュー時メタ思考」が媒介していると仮定し、「インタビュー時メタ思考」が「インタビュー研究へ協力する際の動機」からどのような影響を受けるかについて検討を行うこととした。それにより、研究協力依頼の条件や提示の仕方によって、どのようなメタ思考傾向をもつインフォーマントが集まりやすいかを推測し、インタビュー内容分析の際の一助となることを目的とする。

研究協力動機の測定は「インタビューをお願いした場合、ど

表3 自己意識がインタビュー時メタ思考に与える影響（標準偏回帰係数 β ）

インタビュー時 メタ思考	評価不安	伝達意志	情緒的期待	ストーリー 戦略	言語化困難	共約 不可能性	社会的意義	場の適切さ
自己意識								
私的自己		.349 ***	.189 **		.169 **		.176 *	.278 ***
公的自己		.207 **		.267 ***		-.155 *		
社会的不安	.439 ***				.506 ***	.356 ***	-.189 **	.262 ***
説明率 (R^2)	.193 ***	.215 ***	.036 **	.71 ***	.318 ***	.102 ***	.054 **	.174 ***

(* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$)

のような条件であれば応じるか」に関して「インタビュー動機を尋ねる独自質問」を新たに作成し尋ねた。独自質問は因子構成を持たない単一質問であり、先行研究の研究協力動機に関する項目を参考に、筆者と臨床心理学専攻の大学院生 2 名の計 3 名によって 7 項目を案出した。

8.2 方法

(1) 調査対象者と時期

6.2(1) と同時に実施した。

(2) 調査材料

「インタビュー時メタ思考尺度」: 8 因子 37 項目 (6 件法)

「インタビュー動機を尋ねる独自質問」: 7 項目 (6 件法: まったくあてはまらない～とてもあてはまる)。Q1. 無条件でインタビューに応じる。Q2. 時間や場所の条件があれば、インタビューに応じる。Q3. 適切な報酬があれば、インタビューに応じる。Q4. 自分にとって意味があれば、インタビューに応じる。Q5. 社会にとって意味があれば、インタビューに応じる。Q6. よい印象のインタビューアであれば、インタビューに応じる。Q7. プライバシーが守られていれば、インタビューに応じる。

(3) 分析

重回帰分析: 「インタビュー動機を尋ねる独自質問」の各項目を説明変数, 「インタビュー時メタ思考尺度」の各因子を基準変数として 8 因子すべてについてステップワイズ法 (変数増加減法) による重回帰分析を行った。なお, 「インタビュー動機を尋ねる独自質問」は, 全項目において天井・床効果が認められないことを確認した上で分析に使用した。

8.3 結果

重回帰分析: インタビュー研究へ協力する際の動機 (単一質問: 7 項目) がインタビュー時メタ思考 (8 因子) にどのように影響を与えるかを重回帰分析によって検討した。結果をまとめたものを表 4 に示す。

8.4 考察

「インタビュー動機を尋ねる独自質問」は因子としての尺度構成をもたない単一質問のため, 説明変数としては強固ではな

い傾向があった。そのため現段階では解釈は慎重に行う必要があるが, それを踏まえた上で明らかになった点について考察したい。

無条件でインタビューに応じる者は, 他者からの評価をあまり気にかけず, 調査者に対して〈情緒的期待〉や理解してもらいたいという気持ち (〈共約不可能性〉の逆) を有している傾向が示唆された。また, 〈場の適切さ〉を顧慮しない傾向がみられる。

時間や場所の条件があればインタビューに応じる者は, 〈場の適切さ〉に注意を払いながら, 的確に自己を伝えようとする〈伝達意思〉をもっており, 合理的に判断をする傾向が示唆された。

適切な報酬があればインタビューに応じる者は, 調査協力を戦略的に利用する観点から〈ストーリー戦略〉をもつ傾向があるが, 説明率 (R^2) は低いため慎重に解釈すべきであろう。

自分にとって意味があればインタビューに応じる者は, 〈場の適切さ〉を顧慮しない傾向が伺える。

社会にとって意味があればインタビューに応じる者は, 当然ではあるが〈社会的意義〉を念頭においており, 自分の気持ちを伝えることができる (〈言語化困難〉の逆), 理解してもらいたい (〈共約不可能性〉の逆) という思いをもって語る傾向が示唆された。

よい印象のインタビューアであればインタビューに応じる者は, マイナスの評価をされることを恐れる〈評価不安〉を感じ, 〈場の適切さ〉にも注意を払いながら語る傾向が伺える。

プライバシーが守られていればインタビューに応じる者は, 自分の気持ちをうまく表現できない〈言語化困難〉を感じており, 守られた場所で落ち着いて話をしたいと思う傾向が示唆された。

インタビュー分析時の示唆としては例えば以下のような展開が考えられる。調査者はインタビュー終了後にインフォーマントに研究協力動機を尋ね, それによりどのようなメタ思考を持ちながら語りがなされたかを推測し, 分析・解釈の際の参考にすることができるだろう。例えば, 「無条件で応じたいと思った」という場合, そのインフォーマントは調査者に対する受容や共感といった〈情緒的期待〉を持ちながら語っていた可能性があ

表4 インタビュー動機がインタビュー時メタ思考に与える影響 (標準偏回帰係数 β)

インタビュー時 メタ思考	評価不安	伝達意志	情緒的期待	ストーリー 戦略	言語化困難	共約 不可能性	社会的意義	場の適切さ
インタビュー 動機								
無条件	-.317 ***		.293 ***		-.194 *	-.267 ***		-.31 **
時間・場所		.262 ***						.317 **
適切な報酬				.165 *				
自分に意味								-.226 **
社会に意味					-.192 *	-.189 *	.355 ***	
よい印象の インタビューア	.159 *							.225 **
プライバシー					.227 ***			
説明率 (R^2)	.076 ***	.068 ***	.086 ***	.027 *	.078 ***	.157 *	.126 ***	.077 ***

有意な β のみを図示

(* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$)

りえる。

最後に、本研究では先行研究の研究協力動機を参考に質問紙を作成したが、今後は統計的な確度を上げるために広く項目を集め、より説明力の強い質問項目に練り直すことが課題といえる。

9. おわりに

本研究はインフォーマントがインタビュー実施時にどのような環境変数、心理変数の影響を認識し、メタ思考をもちながら語りうるのかについて、質問紙を用いて調査を行ったものである。「インタビュー時メタ思考尺度」の開発という着想を得たことで、これまで経験的に捉えられてきたインフォーマントの「言葉にならなかった言葉」の一端を心理的構成概念という形ではあるが明らかにすることができた。質問紙調査を行うことによってインタビュー調査を依頼した際にはインタビューに応じないタイプのインフォーマントからも一定のデータを得られたことは、インタビューデータの質を考える上で重要な示唆となった。一方で、本研究は場面想起法による調査のため、実際のインタビュー場面で同一のメタ思考が想起されるかについては今後の研究で検証する必要がある。

また、自己意識や研究協力動機とインフォーマントのインタビュー時メタ思考の関連が一定程度明らかになったことで、大学等において調査協力募集に応じたインフォーマントの特性を推察し、内容を考察する際の手がかりとしても利用されることが期待される。

今後の研究展望としては、メタ思考が実際の語り内容にどのような影響を及ぼすかについての精緻な分析を進めていく必要があるだろう。そして、本尺度もしくは本尺度で得られた視点をを用いることにより、今後の情報文化研究においてエスノグラフィー調査、インタビュー調査等で得られたデータの分析・解釈が、その内容の理解のみならず、語られた背景をも考慮した複層的な理解として展開されることを期待するものである。

最後に、本研究は対象を学生と定めている。そのためメタ思考や自己意識の中に思春期・青年期心性の特徴も多く認められる。この点は、思春期・青年期を対象としたインタビュー研究の理解を促進する知見でありながら、本研究の限界を規定するものであることも付言したい。

謝辞

本調査実施にあたり、ご支援を賜りました先生方ならびに調査にご協力いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は2011年度早稲田大学特定課題研究費（課題番号：2011A-925）の助成を受けたものである。

注

- (1) 理論の提唱者であるマリノフスキー自身がしばしば調査地の住民との関係をこじらせ、敵意に満ちた思いを募らせていたことは、『マリノフスキー日記』^[29]に詳しい。しかし、経験的方法知としてマリノフスキー自身が重視し、それが今日まで一定の影

響力をもちえていることは間違いない。

- (2) エドモンド・リーチはマリノフスキー理論の曖昧さを舌鋒鋭く批判している^[30]。リーチが「トロブリアンド（調査地）の住民について語るマリノフスキーは天才的であるが、文化一般を語るマリノフスキーはただの凡人である」と評するように、マリノフスキーはフィールドの活き活きとした描写に長けながらも、それを一般理論化することができなかった。
- (3) 13要因は意味のとり難い用語もあるため、括弧内に筆者による解題を付記した。
- (4) 本研究ではすべての調査協力依頼に際して、文書と口頭にて以下の倫理的配慮を行い、インフォームドコンセントを得た。「アンケートはインタビュー研究法の学問的発展のために利用される」、「アンケートは無記名である」、「アンケートへの参加は任意である」、「参加を拒否しても学業成績等への不利益はない」、「途中で参加を拒否したり、答えたくない項目には答えない自由がある」、「回答をもってアンケート参加に同意したものとする」。
- (5) 本研究ではインタビュー場面を想起し質問紙に答える手法を用いているため、本データをもって実際のインタビュー時メタ思考を明らかにしたと考えることには慎重であらねばならない。しかし、実際のインタビューには応じないタイプのインフォーマントがどのような性格や思考の傾向を持っているのか、なぜ応じないのか等についてのデータを収集できるという利点を踏まえ、本研究においてはこの手法を採用した。
- (6) 菅原^[31]はFenigstein^[32]を参考に日本語版の自己意識尺度を作成しており日本でもっともよく利用される自己意識尺度の1つとなっている（例えば、遠藤^[33]）。菅原版はFenigsteinらが想定した3因子のうち、〈社会的不安〉を省いて分析を行っているが、後年になって、外山ら^[34]は確認的因子分析を行い、〈社会的不安〉因子を含めた因子構造でモデル適合度を確認している。以上を踏まえ、本研究では一定のモデルの妥当性が検証されており、且つ「インタビュー時メタ思考尺度」との関連も予測されることから〈社会的不安〉因子を外山らの尺度より採用し、菅原の尺度より〈私的自己意識〉、〈公的自己意識〉を合わせた3因子構造の質問紙とした。

参考文献

- [1] 田中共子：この本からはじめる質的心理学—テキスト書評特集、質的心理学研究, no.9, pp.186-187, (2010).
- [2] 近藤敏夫：インタビュー調査の技法—現象学的社会学の具体的利用一、佛大社会学, 第34号, pp.1-13, (2009).
- [3] 渡辺文夫, 山内宏太郎：第8章 調査的面接法, 高橋順一, 渡辺文夫, 大淵憲一編著『人間科学研究ハンドブック』ナカニシヤ出版, pp.123-134, (1998).
- [4] Bartlett, F. C: Remembering: A study in experimental and social psychology, Cambridge University Press, Cambridge (1932). = 宇津木保, 辻正三訳『想起の心理学—実験的社会的心理学における一研究』誠信書房 (1983).
- [5] Paul, T: The Voice of the Past: Oral History Third Edition, Oxford University Press, Oxford (2000). = 酒井順子訳『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』青木書店, p.229, (2002).
- [6] 森岡正芳：当事者の視点に立つということ, 宮内洋, 今尾真弓編著『あなたは当事者ではない〈当事者〉をめぐる質的心理学研究』北大路書房, pp.185-195, (2007).
- [7] 神田橋條治『追補 精神科診断面接のコツ』岩崎学術出版社, p.119, (1994).
- [8] Kirk, J, Miller, M: Reliability and Validity in Qualitative Research, Sage, London, pp.15-16, (1986).
- [9] 余語琢磨：「エスノグラフィーの素朴」から方法論の深化へ—序：

- 人類学におけるフィールドデータの扱い方再考一, 文化人類学研究, no.10, pp.1-12, (2009).
- [10] Harris, M: Rise of anthropological theory, Thomas Y. Crowell Company, New York, pp.568-604, (1968).
- [11] 鈴木淳子『調査的面接の技法 第2版』ナカニシヤ出版, p.93, (2002).
- [12] 鳥越皓之: 経験と生活環境主義, 鳥越皓之編『環境問題の社会学論—生活環境主義の立場から』御茶の水書房, pp.13-53, (1989).
- [13] 小林多寿子: <親密さ>と<深さ>—コミュニケーション論からみたライフヒストリー—, 社会学評論, 42(4), pp.419-434, (1992).
- [14] 前掲書 [7]
- [15] 斎藤定良: 調査的面接法における面接者の要件と訓練, 続有恒, 村上英治編『心理学研究法 11 面接』東京大学出版会, pp.139-164, (1975).
- [16] 前掲書 [11], p.119.
- [17] 桂川泰典: インタビュー時メタ思考の分析によるナラティブデータ複層化の試み, 早稲田文化人類学会 第12回総会 研究発表 (2011).
- [18] Ken, Plummer: Documents of Life, George Allen & Unwin (Publishers) Ltd, London (1983). = 原田勝弘, 川合隆男, 下田平裕身監訳『ライフドキュメント 生活記録の社会学—方法としての生活史研究案内—』光生館, p.134, (1991).
- [19] 山本輝夫, 林英夫: 第3章 調査的面接法, 続有恒, 八木冕監修『心理学研究法 第11巻 面接』東京大学出版, pp.65-124, (1975).
- [20] 前掲書 [3], pp.135-148.
- [21] G. W. オールポート『心理学における個人的記録の利用法』培風館, pp.71-77, (1970). —
- [22] 菅原健介: 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み, 心理学研究, 第55巻, 第3号, pp.184-188, (1984).
- [23] 外山美樹, 桜井茂男: 自己意識尺度の因子構造の再検討, 筑波大学心理学研究, 第21号, pp.141-147, (1999).
- [24] Fenigstein, A, Scheier, M. F, & Buss, A. H: Public and private self-consciousness: Assessment and theory, Journal of Consulting and Clinical Psychology, 43, pp.522-527, (1975).
- [25] Scheier, M. F: Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs, Journal of Personality and Social Psychology, 39, pp.514-521, (1980).
- [26] 前掲書 [25]
- [27] 前掲書 [22]
- [28] 前掲書 [15]
- [29] B. マリノフスキー『マリノフスキー日記』平凡社 (1987).
- [30] Learch, E. R: The Epistemological Background to Malinowski's Empiricism, Firth, R: Man and Culture, Routledge & Kegan Paul, London, p.119, (1957).
- [31] 前掲書 [22]
- [32] 前掲書 [24]
- [33] 遠藤公久: 自己開示における抵抗感の構造, カウンセリング研究, vol.28, No.1, pp.47-57, (1995).
- [34] 前掲書 [23]
- 桂川 泰典 (かつらがわ たいすけ)
- 早稲田大学人間科学学術院助手。臨床心理士。専門は臨床心理学, 特別支援教育学, ナラティブ論, 治療文化論。